

# 研究成果の概要

## 東洋大学国際哲学研究センター

### (1) 哲学の国際化・グローバル化に関する全体シンポジウムの開催

グローバル化の中で未来の方向性を失い混迷を極めている現代社会のなかで、哲学の観点から人間や社会のあり方を根源から考察し、地球社会の適切な進路を見出すべく問題解決型の哲学研究を推進することが本センターの設立目的の一つであった。それを果たすべく、センター全体としては、「哲学の国際化」を統一テーマとし、「哲学の国際化は可能か」(平成 23 年度)、「グローバルな現実に向きあう哲学」(平成 24 年度)、「国際化とは何をする事なのか～東洋大学国際哲学研究センターの「これまでとこれから」～」(平成 26 年度)、「22 世紀の世界哲学に向けて」(平成 27 年度)と題する全体シンポジウムを開催し、各ユニットを中心とした国内外の研究者が研究成果を持ち寄り、討論を行い、問題意識を深めていった。その結果、国際化やグローバル化といっても土着性なしの世界化であるグローバリズムではなく、文化の違いを土台にしながら、それぞれの文化が個性を保ちながら交流すること、すなわち、自分達自身の文化に根づいた国際化が必要であるという視点を現代社会に対して発信しえたという点が、大きな成果であった。その成果は『国際哲学研究』1、2、4、5号に掲載している。

### (2) 第1ユニット：近代日本の哲学、特に井上円了の哲学の国際的な研究と発信

第1ユニットは、井上円了の思想を中心とした近代日本哲学の解明を中心的な課題に掲げ、その国際的な研究と発信を目指してきた。そのため、2014年3月末までに、明治期の思想家をテーマにした研究会を計22回開催した。これらの研究活動の成果をもとに、2014年4月より連続研究会「明治期における人間観と世界観」という連続研究会を計10回開催した。この研究会を通じて、江戸期の先進性と明治期の革新性を明らかにすることができた。この研究成果は市販の書籍『近代化と伝統の間—明治期の人間観と世界観』にまとめられ、1月末に刊行された。

また東アジアにおける近代仏教の問題を国際的な視点で解明するために、韓国・東国大学校と研究協定を結び、共同セミナーを日本で計2回開催し、韓国でも計2回目のセミナーを開催した。協定により国際的な研究ネットワーク基盤が形成され、グローバルな視野に立った東アジア思想研究が推進された。

さらに日本とフランス・ストラスブール大学をWEBで結んで開催されたWEB講演会は、ストラスブール大学の正規の授業の一環として行われた。講演による国際的な研究の発信であるとともに、WEBを使用した国際的な連携の中で教育活動を行う実践となった。

その他、国際学会(於香港)での井上円了についてのパネルセッションの開催、井上円了データベースの作成など、国内外への情報発信に努めた。

また、第1ユニットの研究活動の一環としてセンター内に国際井上円了学会を設立し、計4回の学術大会を開催した。ドイツ、アメリカ、中国、メキシコから研究者を招き、シンポジウムや招待講演を行った。また、日本、アメリカ、ドイツ、スイスの研究者が発表する研究発表も行った。さらに、フランス、アメリカ、ハンガリーで海外研究集会を開催し、国際的な研究体制の構築を目指した。これらの成果は、オンラインジャーナル『国際井上円了研究』1～4号に掲載され、日本語と英語の二言語で全世界に向けて公開されている。

これまでの研究で達成された大きな点として、国際井上円了学会の設立とそれによる国際的なネットワークの構築とその運営、東国大学校との研究協定、WEBを使用した国際的な教育活動の実践が挙げられる。こうした活動により、国際的な研究と教育の基盤が構築された。

### (3) 第2ユニット：東西哲学を貫く方法論に関する研究ならびに実践的課題としての「ポスト福島哲学」研究

第2ユニットは、普遍性と個性という2つのアプローチから、東西哲学・宗教を貫く世界哲学の方法論研究という課題に取り組んできた。それらは3つの研究に集約される。

#### (a) 方法論研究

方法論研究は3つに分類される。①哲学を中心とする個別専攻領域における方法論についての研究（研究会）は、理論的基盤を担うものである。それぞれの個別研究から普遍性へのアプローチが行われた。研究は27回に上り、方法論という大きなテーマの元、様々な議論の場を提供し続けてきたことこそに大きな意義がある。②哲学的基本概念と立場についての国際的共有（WEB国際会議）は、物質的基盤を担うものである。日本を含む二拠点もしくは三拠点をインターネットでつなぎ、同時通訳・逐次通訳を活用し、直接的な哲学的な議論を交わすWEB国際会議は、あらゆる場所の制約を超えて行われる不断の哲学議論の場を提供し、大きな成功を収めた。③人文系学問内での別個な専攻領域間の技法共有化の方法として、クロスセクションの技法の開発を行った。普遍的方法論の開発は、有機的なネットワークと新たな学問体系を形作ることができるが、その第1歩として、中国文学、インド哲学、西洋哲学をモデルケースとした近接領域での議論の場を持った。他領域との連携により、互いに欠如していることを補い合い、方法の安定性と論理的妥当性の担保を行うことが可能となるのである。これら3つの成果は、市販の書籍『越境する哲学—体系と方法を求めて』としてまとめられた。

#### (b) ポスト福島哲学＝来たるべきフクシマの哲学

2011年3月の東日本大震災とりわけ東京電力福島第一原子力発電所の過酷事故により我々を取り巻く環境は一変してしまった。すなわち、目に見ることも、嗅ぐことも、聞くこともできない危機に対して我々がどう立ち向かっていくのか、そしてそれらを哲学的にどのように考えていくのかという新たな課題に立ち向かっていかなければならないということである。そこで第2ユニットが主体となり、「ポスト福島哲学」というテーマのもとに、WEB国際会議や国内外の研究者および実践に携わる関係者を招いた研究会等、継続的な研究を計14回に渡って行ってきた。研究者らがそれぞれの知を持ち寄り、議論するだけでなく、実践に携わる関係者を招いての研究会を行い、我々が直面している事態の深刻さが浮き彫りになると共に、哲学の研究者と実践活動家たちが互いに協力して努力しなければならないということが明確になった。そして、具体的な提言を行うだけでなく、実践活動の成果、問題点を受け取りながら、哲学的議論を行い、それを実践活動にフィードバックして活かすという問題解決型の実践的哲学の構築を行ってきたことが、この研究の大きな成果である。すなわち、「ポスト福島哲学」とは、哲学的方法論を具体的な実践に適用させた理論と実践の往復運動なのである。そして、これらの成果は市販の書籍『ポストフクシマの哲学—原発のない世界のために』としてまとめられ、8月に刊行された。

#### (c) 〈法〉概念研究

〈法〉概念研究は、その普遍性と多様性という点から、方法論研究にとって重要な位置を占めるものである。この研究は、2011年度のインド古代法の研究からスタートした。2011年度には、〈法〉そのものの形態と機能の諸相を時間的・空間的に広くとらえて提示することを課題とし、第1回シンポジウムが開催された。そこでは、古代ギリシア、イスラーム、インド、中国、そして仏教思想における〈法〉概念が具体的な事例によって示され、相互の理解を深めることができた。2015年度の第2回目では〈法〉の動的なありかたに着目し、社会の近代化と法の変容を問題とした。異なる法系が継受され、変容・定着するプロセスを東欧、アジア、南米の事例に探り、それらを抽象的に理論化する研究がなされた。方法論を個別課題へと適用させたものである「法」概念の研究は、時代、地域、そして研究分野を越えた議論の場を作り、多角的な方法論の展開を切り拓いたのである。そしてこれらの成果は2冊の『国際哲学研究』別冊としてまとめられた。

### (4) 第3ユニット：多文化共生に関する研究会、海外研究集会、国際シンポジウムの開催。

多文化共生社会の思想基盤研究を行う第3ユニットでは、文献研究と国内外での実地調査の両面から、多文化社会の現状把握と多文化「共生」社会へ向けての課題や問題点を浮き彫りにし、新たな哲学の構築へ向けての提言を

行ってきた。

(a) 「イラン・イスラームとの対話」と題するイランとの共同研究を行った。2012年度はイランから4名の宗教者・哲学者、国内から5名の研究者を招き、国際シンポジウムを開催した。翌年はわれわれの側からイラン・アカデミーサイエンスを訪問し、東洋と西洋の概念の再検討を課題とするシンポジウムを開催した。2014年度は特に井筒俊彦の共生哲学をテーマとし、イランから4名の宗教者・哲学者を招き、国際シンポジウムを開催した。2015年度もイランを訪問し、シンポジウムを開催した。それにより、従来の西洋／東洋という対立枠を解体し、それらを媒介するものとしてのイランという新しい視座から、共生思想への提言を行うことができた。

(b) 「宗教間の共生は可能か」をテーマとし、キリスト教、仏教、神道、修験道、ヒンドゥー教、ジャイナ教の複数の研究者が提題をする研究会・シンポジウムを21回開催した。特に、各宗教に通底するものとしての「瞑想」という方法にも着目し、心身の健康や共生に対する瞑想という平和的手段の効果や意義についての研究を蓄積した。その成果は『国際哲学研究別冊』6としてまとめられた。

(c) 多文化・多宗教の相剋の実態調査と共生への可能性を探るべく、海外実地調査を行った。昨今「幸福の国」として喧伝されているブータンであるが、メディアで喧伝されているものと異なった実情を実地見聞し、また、現地の高僧と研究集会を持つことができた。ミャンマー、タイ、アメリカでは現地の瞑想センターや寺院を調査し、関係者にヒアリング調査を行った。

(d) その他、哲学プロパーの観点から、精神と身体の共生、自然との共生、伝統と現代との共生等をテーマとした研究会を18回重ねてきた。

特に今まで等閑視されてきたイランとの共同研究は他に類を見ないものであり、その成果は『国際哲学研究別冊』3、7として結実した。日本語、英語、フランス語、ペルシア語の論考とその和訳を含むものである。また、国内外の複数の宗教の研究者が共生に関する問題意識を持ち提言を行ってきたことにより、所期の目的であった多文化共生社会の思想基盤研究の研究拠点としての役割を果たすことができた。

それらの成果は『宗教の壁を乗り越える—多文化共生社会への思想的基盤』として公刊した。

### <優れた成果があがった点>

海外から計38名の研究者を招き、哲学研究の国際的研究拠点の役割を果たした。

国際井上円了学会の設立、『国際井上円了研究』の公刊によって、国際的な研究基盤が形成され、国際的な視野で捉えられた井上円了の姿が明らかにされた。具体的には、井上円了が中国の近代化に大きな影響を与えたことや、西洋哲学とは異なる新たな哲学の枠組み構築したことなどが明らかになった。

東国大学校との共同セミナーを通じ、日韓の研究者が協働し、近代東アジアの仏教の様相が明らかにされた。日韓の研究者の相互の視点を持ち寄ることによって、互いに欠けていた観点が発見され、研究が補完されることになった。それにより、従来にない視点による新たな研究の可能性が深まることとなった。

継続的にWEB国際会議を開くことにより方法論が蓄積され、インターネットを用いた哲学議論の場を作るという新たなネットワーク形成の道を開いた。

多文化共生の問題を正面から取り上げ、各宗教や哲学思想の数十名の研究者の観点から、現状と課題に関する問題提起や研究成果を得ることができた。その成果は『国際哲学研究』別冊3、5、6、7の4冊として結実した。

今までの研究成果をまとめ、一般向けの書籍として計4冊の刊行を行った。

- ①『近代化と伝統の間—明治期の人間観と世界観』(2016年1月、教育評論社):連続研究会「明治期における人間観と世界観」を通じて、近世末期の日本の先進性が明らかにされるとともに、明治期に入ってきた西洋哲学が伝統を活性化させながら新たなパラダイムを切り開いたことが明らかにされ、この成果をまとめたもの。
- ②『越境する哲学—体系と方法を求めて』(2015年11月、春風社):普遍的な方法論の研究成果をまとめたもの。
- ③『ポストフクシマの哲学—原発のない世界のために』(2015年8月、明石書店):「ポスト福島」の研究成果として、哲学者と実践的活動者の両者からのアプローチが試みられている。
- ④『宗教の壁を乗り越える—多文化共生社会への思想的基盤』(2016年1月、ノンブル社):宗教の問題を中心に、多文化共生に関する5年の研究成果をとりまとめた書籍。